

少女マンガに描かれた男性像の変化に関する定量的分析 Quantitative analysis of male likeness in shojo manga

山本通正[†] 中川侑[†] 吉元涼介[†] 芳鐘冬樹[†]
Yamamoto Michimasa Nakagawa Atsumu Yoshimoto Ryosuke Yoshikane Fuyuki

1. はじめに

近年、女子中高生を読者対象とした「少女マンガ」は、2016年に実写映画化される『ちはやふる(末次由紀)』や『オオカミ少女と黒王子(八田鮎子)』をはじめ多くの作品が人気を博し、また評価されている。それにともない、少女マンガに関する研究が増えている。なかでも少女マンガのキャラクターに見られる女性像についての研究や恋愛対象の変化に関する研究は多数存在する(馬場(1997)、山田(2000)、秋月(2006)、トミヤマ(2014)など)。しかしその多くは定性的な分析によるもので、定量的な調査に基づくものはほとんどない。このような背景から、本研究では、客観的な尺度を用いて、少女マンガにおける恋愛対象としての男性像の変化を明らかにすることを目的とする。

2. 先行研究

因[2007]は「フィクションにおけるジェンダー指標を伴う言語表現がジェンダーにかかわるステレオタイプの価値を上書きしうる」つまりマンガや文学の中の発言内容が社会に影響を与え価値観を形成すると指摘している。恋愛対象に焦点を当てたものではないが、秋月(2014)はマンガのキャラクターを持つ言語的特徴についてまとめている。また、マンガに関するものでないが、原口(2013)は、ライトノベル 100 作品を対象に、各々の第 1 巻について構造をパターン化し特徴を統計的に分析している。

3. 研究手法

3.1 分析対象

以下の条件を満たす作品を対象とする。

- ・「講談社漫画大賞少女部門」あるいは「小学館漫画賞少女部門」を受賞した作品。
- ・1巻の段階で恋愛に関する描写がある作品。

講談社漫画賞および小学館漫画賞はどちらも 1970 年代から連続して、その年一番社会に影響を与えた少女マンガを表彰している。そのため、男性像の経時的変化を明らかにするのに適している。また、本研究では恋愛対象としての男性像を研究の対象とするため、非恋愛作品と恋愛作品を区別する必要がある。発行巻数に差異のある作品を同じ条件で比べるため、原口(2013)と同様、1巻に関する調査を行うこととした。

上記の条件を満たす作品において恋愛に関する描写がある男性キャラクターを評価対象とした。以下に、キャラクター名(作品名・受賞年)を示す。

- 修、蔵之介(海月姫・2010)
- マヤ、梶間、諏訪、春田(潔く柔く・2009)
- 翔太、龍、ピン(君に届け・2008)
- 清四郎、美童、魅録(有閑倶楽部・1986)
- 悟、伊織(まひろ体験・1984)
- ギドウ、マーシー、ピーター(LadyLove・1983)

比較的近年の作品(2000年以降)、比較的旧い作品(1990年以前)、それぞれ3件ずつ対象とした。

3.2 評価尺度

秋月(2014)の分析観点の一部を適用し、対象キャラクター自身の発言に見られる一人称と対象語に基づいて彼らの特徴を調べた。具体的には、1巻での発言(ふきだしなど、台詞として描かれたもの)における、一人称の種別ごと、対象語の種別ごとの出現回数を集計した。

ヒロインの恋愛に注目しているため、対象語については、ヒロインを呼ぶときに使用した語を調査し、「名前」「敬称」「二人称代名詞」「三人称代名詞」「愛称」の5パターンに分類して出現回数を集計した。「名前」は、姓、名、またはフルネームをそのまま呼んだ呼び捨てを分類した。「敬称」は、名前に「さん」や「ちゃん」といった敬称をつけたものを分類した。「二人称代名詞」には、「あなた」や「きみ」「おまえ」といったものを分類した。「三人称代名詞」には「こいつ」などを分類した。

4. 結果および考察

表1は各キャラクターの一人称について、表2は対象語(ヒロインに対する呼び方)について、種別ごとの出現回数を集計した結果である。データの規模を表す情報として、各キャラクターの発言数も表1に付している。発言数は、ふきだしを単位とし集計した。一人称は、「俺(おれ、オレという表記も含む)」「僕(ぼく、ボクという表記も含む)」「私」の3種類が見られた。

まず、新しいマンガの男性キャラクターの方が、発言数が多い傾向がある(表1)。これは、新しいマンガでは男性キャラクターの登場頻度が高いことに起因していると考えられる。また、彼らの高い登場頻度は、ヒロインとの距離の近さを表しているとも推測される。

新しいマンガ(2000年以降)では、恋愛対象の男性が敬称でヒロインを呼ぶ回数が多いが、旧いマンガ(1990年以前)では敬称をつけて呼んでいるものはなかった。逆に、旧いマンガでは、二人称代名詞および三人称代名詞で呼ぶ回数が多かった(表2)。つまり、男性キャラクターは、新しいマンガでは敬称をつけてヒロインを呼び、古いマンガではヒロインを二人称代名詞もしくは三人称代名詞で呼ぶという傾向が観察された。この傾向の変化もまた、男性

キャラクターとヒロインの間の距離が近くなったためではないかと推測される。

本研究で観察された傾向の変化は、トミヤマ(2014)で述べられている「白馬の王子様ではなく、いわゆるモブタイプ(より身近で一般的な男性像)に変化してきている」という論とも合致する。また、これは、秋月(2006)で述べられている「女性キャラクターが恋愛に対して積極的になっている」という傾向が関係しているのではないかと推測される。

5. おわりに

本研究では、男性キャラクターの発言に関する特徴を手がかりに、少女マンガに見られる男性像の傾向の変化について考察した。今回は、6作品を対象とする分析にとどまっているため、統計的に有意な傾向までは明らかにすることができなかった。今後は、対象作品を増やすとともに、男性像の評価尺度についても再検討して、尺度の洗練・追加を行いたい。また、それらの尺度を総体的に分析して、傾向の変化をより明確に示すため、クラスター分析などの多変量解析も併せて行う予定である。

	発言数	俺	僕	私	計
修	71	0	0	0	0
蔵之助	270	14	0	0	14
マヤ	71	8	0	0	8
梶間	79	0	1	0	1
諏訪	83	4	2	0	6
春田	50	3	0	0	3
翔太	246	25	0	0	25
龍	13	0	0	0	0
ピン	31	2	0	0	2
清四郎	104	0	0	0	0
美童	70	0	7	2	9
魅録	61	2	0	0	2
悟	35	0	2	0	2
伊織	58	17	0	0	17
ギドウ	39	3	1	0	4
マーシー	154	11	0	0	11
ピーター	25	0	0	0	0

表1 一人称の出現回数

	名前	敬称	二人称 代名詞	三人称 代名詞	愛称	計
マヤ	4	0	3	1	0	8
梶間	1	3	0	0	0	4
諏訪	0	2	0	0	0	2
春田	3	1	4	0	0	8
修	0	5	0	0	0	5
蔵之助	4	14	1	0	0	19
翔太	41	0	0	1	0	42
龍	0	0	0	0	0	0
ピン	1	0	0	0	0	1
清四郎	11	0	4	0	0	15
美童	10	0	2	0	0	12
魅録	6	0	2	1	0	9
悟	0	0	1	0	0	1
伊織	0	0	3	5	0	8
ギドウ	2	0	5	0	0	7
マーシー	21	0	3	1	10	35
ピーター	2	0	0	0	1	3

表2 対象語の出現回数

参考文献

- 秋月 高太郎. 特集, ステレオタイプ: 失われた「ためらい」, 少女マンガヒロインの変遷. 文学. 2006, 7(6), p.130-138.
- 秋月 高太郎. 脇役男子の言語学 - スネ夫やジャイアンはどのように話すのか. 尚絅学院大学紀要. 2014, (67), p.41-54.
- トミヤマ ユキコ. 特集, 総特集 イケメン・スタディーズ: モブ化するイケメンたち: 少女マンガの王子様像をめぐって. ユリイカ. 2014, 46(10), p.208-211.
- 因京子. 翻訳漫画における女性登場人物の言葉遣い: 女性ジェンダー表示形式を中心に. 日本語とジェンダー. 2007, 7.
- 馬場礼子. 少女マンガに見る男性像. 大航海. 1997, (17), p.27-32.
- 原口良介. ライトノベルにおける物語展開パターンの構造化および分析. 2013, 2012年度筑波大学知識情報・図書館学類卒業論文, 61p.
- 山田浩之. 少女マンガに見る現代の教師像: 憧れの対象としての教師. 松山大学論集. 2000, 12(3), p.65-84.